

理学部を去るにあたって

木村俊房（数学教室）

私の記憶装置は相当悪いらしく、昔のことは大半霧の中である。よかった事も大して憶えていないが、一方、嫌なこともかなり忘れてるので、差引すればまあまあであろう。しかし、いくつかのことは憶えているので、それらの2、3を書くことにする。

大学3年(当時は後期といっていた)になり、福原満洲雄先生のもとで平沢義一君と2人でセミナーをやって頂くことになった。その時、先生から論文を書くためのセミナーにしますか、本を読むだけのセミナーにしますかと聞かれた。その頃は、論文などというのは偉大な数学者が書くものであり、定理なども歴史上の人物による発見であろうと考えていたので、びっくりして本の方をお願いします、と答えた。

卒業後、すぐに立教大学へ吉田洋一先生（「零の発見」で御存知であろう）の助手としていった。その頃、立教大学から数学の紀要を出そうという話が起っていて、その議論を聞き、数学者たらんとする者は論文を書かねばならぬということを知った。慌てて問題を探し、それについて考えた。1年程して、幸い小さな結果を得た。福原先生は殆どどの論文をフランス語で書かれていたので、私もフランス語で書いた方がよいと思い、始めて仏作を行った。福原先生に見て頂く前に吉田先生に見て頂いた。その折、吉田先生に厳しく論文の書き方について教えて頂いた。その時の教訓を私の弟子（と思っている人）に生かすのが私の義務と心得、実行したつもりである。

吉田先生のいわれるには、フランス語の定理（théorème）は大きな定理を意味するというので、定理を命題（proposition）に直されてしまった。しかし、命題に落ちぶれたとはいえ、その時得た定理はいまも気に入っている。

立教に11年いて、昭和38年4月東大教養学部に移り、2年半後理学部へ来た。毎週土曜日、福原先生の主宰されていた函数方程式セミナー（いまも続いている）に出席していたので、立教時代も本郷の学生時代の延長という気もあり、戻ったという感じは少なかった。福原先生はその翌年東大を退官された。

以来20年以上が過ぎた。よき師、先輩、同寮、後輩にかこまれ、自由な雰囲気の中かで研究、教育に携れたことは本当に幸せだったと思う。驚いたことは、よくできる学生の多いことであった。後生恐るべしとはよく言ったもので、天才、秀才が輩出するのである。このような学生に接し、とかく無精になりがちな私も頑張らざるを得なかった。

東大紛争などあり、その時は何が起っているのかよく分らず、まごまごしているうちに終わったといってよい。敗戦の時は16才であったので、よく分らないまま何年も過した。その時の急激な変化に比べ、東大紛争はどんな変化をもたらすかと考えたが、何かが少し変わったという印象しかない。安田講堂落城のあと理学部幹事として半年間学部長室に日参したが、その年の暮から正月にかけて、毎日計算ばかりしたことがある。計算が終った時、体調がくずれ耳鳴りがしたことを思い出す。

東大卒業以来40年近くたったが、その位たつと世の変化がよく分る。それに応じ、いろいろな制度ややり方を変えていくのは当然である。数学教室では昭和63年度からカリキュラム、セミナーのやり方などの改革を行った。これは、もちろん、若い人達の発想と構想のもとに行われた。しかも、その効果に細かく気配りしている。これは教育についてであるが、研究成果にも目を見張るものがある。まさに、後生恐るべしである。もちろん、

問題は多々ある。しかし、私は数学教室の将来について大いに楽観している。

他の教室も同様であろう。理学部のさらに大い

なる発展を念願するとともに、お世話になった多くの人に心からなる感謝の意を表したい。